

『ノストローモ』における「コントラスト」の意義

—— 様々な象徴的要素を繋ぐもの ——

渡 辺 浩

1. はじめに

『ノストローモ』(*Nostramo*, 1904) はコンラッド作品の中でも、最も人間関係とその描写が複雑なものと考えられているが、それらの要素を総合して印象深い構成とするためには、結果的に読者を納得させるに足る構成が存在する。その一つとして「象徴性」ということは大きな特徴であり、もう一つは象徴的に表した要素を「対照的」に並べ、より印象強く読者に訴えかけている点にある。以上のようなプロセスを考慮しながら『ノストローモ』を分析したときに、「象徴性」と「コントラスト」という二つの手法がたくみに取り入れられていることがわかる。¹ このことにより、十七万語にも及ぶ長編作品の人物と要素がばらばらにもならず、緊張感を最後まで持続することに成功したのである。この論考の目的は、そうした作品の主立った構成要素と人物たちの「象徴性」と「コントラスト」を考察し、それらが作品全体を貫く大きなリズムとして物語の成功に貢献していることを分析することである。

2. 地理的な要素とコントラスト

実際には長期滞在の経験もなく、また二十五年も昔のかすかな記憶を頼りに、全くすばらしい正確さで、コンラッドは南米の不安定な政治状況や、地理的な位置関係、人々の気質等を描き出した。

Mrs. Gould knew the history of the San Tomé mine. Worked in the early days mostly by means of lashes on the backs of slaves, its yield had been paid for in its own weight of human bones. Whole tribes of Indians had perished in the exploitation; and then the mine was abandoned, since with this primitive method it had ceased to make a profitable return, no matter how many corpses were thrown into its maw. Then it became forgotten. It was rediscovered after the War of Independence. An English company obtained the right to work it, and found so rich a vein that neither the exactions of successive governments, nor the periodical raids of recruiting officers upon the population of paid miners they had created, could discourage their perseverance.²

上記のように「銀鉱山の最初の開発は、西欧人が南米に侵略してきた際に、現地人を奴隷にを使って開発したことが発端であるが、その後一度忘れ去られ、近代採掘技術の導入により再び開発が行われるという歴史を辿る。その間に、様々な政府による搾取や内乱などにより数多な危機が発生するが、決して開発が止むことがなかった。」そうした事実には、人間の富への貪欲さが更に強調される導入となっている。コンラッド自身が述べているように、銀山が人々を引き付ける富と欲望を象徴し、ひいては腐敗と墮落

をもたらす、人々の本能的な行動を象徴する存在であることには間違いない。³ 父親から受け継いだこのサン・トメ (San Tomé) の銀山を、ヨーロッパに留学していたグールド (Charles Gould) が父親の言いつけ通り故郷に戻り受け継ぐことがなければ、根本的なストーリー展開はなかったわけである。そして逆に運命的に彼を引き付け、また共和国再建のためには銀山の富が必要と考えた歴代の独裁者、政治家たちの思惑も言うに及ばず、直接に銀に興味のないものたちまでも運命の渦の中へ、どちらかという不幸な流れの中に巻き込んでゆく銀山は、物語の中の求心力である。⁴ そして問題点は、この第一部「銀山」の中でマイナスな印象につながる銀山の内容はほとんど登場せずに、もっぱら将来の共和国発展の基盤としてのイメージがグールドの信念と共に紹介されている点である。そして先ほど全体的には人々を様々な意味で引き付ける働きをしている銀山ではあるが、もちろん人々に及ぼす影響が最終的には大切なわけであり、具体的な影響もコンラッドは細かく描写している。それは銀山が象徴的に求心力を持ち、坩堝のごとく周囲を巻き込んでゆく印象を与えてはいるが、裏を返せば、それ以上に外へ発信する影響を及ぼしていることを読者に再確認させるわけである。

For the San Tomé mine was to become an institution, a rallying point for everything in the province that needed order and stability to live. Security seemed to flow upon this land from the mountain-gorge. The authorities of Sulaco had learned that the San Tomé mine could make it worth their while to leave things and people alone. This was the nearest approach to the rule of common-sense and justice Charles Gould felt it possible to secure at first. In fact, the mine, with its organization, its population growing fiercely attached to

their position of privileged safety, with its armoury, with its Don Pépé, with its armed body of serenos (where, it was said, many an outlaw and deserter—and even some members of Hernandez's band—had found a place), the mine was a power in the land. (110)

第一部においては物質的な鉱山の影響が主に語られ、人々への生活レベルまでの影響なども考慮に入れながら描く作者の意図は、求心力以上に影響の発信源としての銀山を含んでいることを忘れてはならない。

これに対して第二部「イザベル島」(The Isabels)においては、政治的な動きとして風雲急を告げる流れや、各重要人物たちの経歴などが紹介され、非常に動きの激しい部分となっている。実際にイザベル島が問題となるのは、最後に反乱軍から銀を守るために、ノストローモ (Nostromo) とデクー (Martin Decoud) が島へ銀を輸送する計画を実行する部分である。したがって島の名前を冠することに象徴的な意味合いを込めようとする作者の意図が汲み取れるが、この部分で考えなくてはならぬことは島の役割そのものである。銀山があらゆるものの動機付けに使われ、また登場人物たちの行動の原因を作り出す素となっているとするならば、イザベル島はあらゆる行動と目的の帰結、あるいはその場所と考えられる。⁵ なぜならばノストローモの最大の目的は銀を無事にスラコ (Sulaco) から運び出し、その島へ運ぶことであつたし、そのときの相棒デクーも、考え方の相違はあるにせよ行動を共にすることになるからである。前者は名誉と大いなる虚栄心を満たすため、後者は恋人アントーニア (Antonia Avellanos) への愛と自分の政治的な理論を実行しようとするために行動を起こすのである。とにかく目的は異なっても命をかけて計画を実行し、デクーは命を落とし (自殺をして果て)、長い目で見るとすれば最終的にノストローモ

もこの島で致命傷を負うことになる。また偶然に反乱軍からの難を逃れるために二人の船に忍び込んだ小心者の商人ヒルシュ (Hirsch) と、彼を捕まえて銀を横取りしようとした反逆者ソティロ (Sotillo) 大佐の滅びの末路なども暗示されることとなる。要するに動機が個人的なものであれ、公のものであれ、また善であれ悪であれ、銀をめぐる起こされた行動や思惑が、最終的にこの島で終焉を迎えるような設定が目に見えてくる。これは偶然というよりもやはりこの小さな島をめぐる、多くの背景を用意し、小説の大きな部分にこの島の名を冠したコンラッドに、上述のような意味合いと象徴性を持たせた思惑が最初からあったように考えられる。

The main thing now for success was to get away from the coast and gain the middle of the gulf before day broke. The Isabels were somewhere at hand. "On your left as you look forward, senōr," said Nostromo, suddenly. When his voice ceased, the enormous stillness, without light or sound, seemed to affect Decoud's senses like a powerful drug. He didn't even know at times whether he were asleep or awake. Like a man lost in slumber, he heard nothing, he saw nothing. Even his hand held before his face did not exist for his eyes. The change from the agitation, the passions and the dangers, from the sights and sounds of the shore, was so complete that it would have resembled death had it not been for the survival of his thoughts. In this foretaste of eternal peace they floated vivid and light, like unearthly clear dreams of earthly things that may haunt the souls freed by death from the misty atmosphere of regrets and hopes. Decoud shook himself, shuddered a bit, though the air that drifted past him was

warm. He had the strangest sensation of his soul having just returned into his body from the circumambient darkness in which land, sea, sky, the mountains, and the rocks were as if they had not been. (261-62)

港を出たデクーとノストローモが闇夜の海を漂いイザベル島に向かう場面では、その漆黒の闇が特にデクーに影響を及ぼす様子が克明に描かれている。ヨーロッパ的なインテリとして祖国の様子を批判的に分析する彼が、知識だけでは到底太刀打ちが出来ない命がけの現場と、また言葉では説明出来ない運命の流れのような渡海の中で、神秘的な体験をしてゆくわけである。とにかくイザベル島へ渡ることが、ノストローモを含め多くの人物たちの運命や考え方、感情までも変えてゆくのである。

人物たちの活動の場としての舞台設定としては、以上のようにサン・トメ銀山が、影響を発するプラス極として、またイザベル島がその影響の最終帰結の場としてマイナス極のように働き、また大きな二つの地理的な象徴の働きをなしていることがわかるのである。

3. 人物たちのコントラスト

登場人物に関しても、コンラッドはかなりのはっきりした個性を持たせていることがわかる。最初に読者の注意を引く人物は鉱山経営者グールドとその妻エミリア (Emilia) との対照であろう。前者は銀という資本で国を立て直そうとする「理想主義的な唯物論者」であり、妻は過度の物質的な支配が、精神的な貪欲と腐敗を招くことを危惧する精神的な理想主義者である。また銀山に夫と人生を奪われてしまったような悲哀をたたえた女性である。

The word "incorrigible"—a word lately pronounced by Dr. Monygham—floated into her still and sad immobility. Incorri-

gible in his devotion to the great silver mine was the Senõr Administrador! Incorrigible in his hard, determined service of the material interests to which he had pinned his faith in the triumph of order and justice. Poor boy! She had a clear vision of the grey hairs on his temples. He was perfect—perfect. What more could she have expected? [...] There were to be no more. An immense desolation, the dread of her own continued life, descended upon the first lady of Sulaco. With a prophetic vision she saw herself surviving alone the degradation of her young ideal of life, of love, of work—all alone in the Treasure House of the World. The profound, blind, suffering expression of a painful dream settled on her face with its closed eyes. In the indistinct voice of an unlucky sleeper, lying passive in the grip of a merciless nightmare, she stammered out aimlessly the words—

“Material interest.” (521-22)

物語のはじめにおいては、銀鉱による物質的な繁栄が町と国家の繁栄につながるという正義感を持ち合わせていたチャールズ・グールドであったが、妻の心配をよそに次第に銀山の富の魔力にとりつかれてゆく姿が最終的に描かれる。一応内乱が終わり、見た目は世情が安定したかに見える状況の中で、グールドに対する労働者たちの信望は薄れ、夫人の精神的な孤独感が深まる結末を迎えてゆく。

「精神」と「物質」、またそれを拡大した「信仰」と「無神論」、「忠誠」と「裏切り」、「勇気」と「臆病」といった要素とそれらを具現した人物たちの配置はとくに『ノストローモ』においては巧みであり、読者を飽きさせることはない。⁶ グールド夫妻の他に、性格的な面で印象深い人物に、ノストローモがこの地に流れ着いた

ときに親代わりになってくれたヴィオラ (Viola) 夫妻がいる。夫のジョルジオ (Giorgio) はイタリアのガリバルディ (Garibaldi) 党の党員で、もとは革命の戦士であった。その妻テレサ (Teresa) は二人の娘の母親で、非常に敬虔な女性である。ノストローモを実の息子のように可愛がるが、それぞれ夫は自分の主義に「忠誠」心を抱き、勇敢な人物であり、妻は「信仰」と「精神」的な動機を色濃く持つ女性であった。この夫婦の二人の娘、リンダ (Linda) とジゼル (Giselle) にしてもストイックでおとなしい姉と、奔放で活動的、また計算高い妹という設定となっており、ノストローモの生き方に大いに影響を与えている。この作品において、南米の国や政情不安が見事に描かれているために、ラテンアメリカの風土がうまく表現されている点が指摘されているが、特に軍人や権力者の性格が巧みに描かれていることが人物描写としては秀逸であると思われる。⁷ 政治家としての理想的人物ドン・ホセ・アベラヌス (Don José Avelanos) は以前の独裁者ベントー (Guzman Bento) 時代の圧制に対しても一貫して戦い、国民に対する「忠誠」と「勇気」の具現者のように描かれ、彼の娘アントーニアも同じような美德を備えた娘として描かれている。新体制に自分の利あらずと考え、ストーリーの重要な流れとなる反乱を起こすモンテロ将軍 (General Montero)、また彼の以前からのライバルであるが、最後までブランコ (Blancos) 党を裏切らず戦うバリオス将軍 (General Barrios) 等、社会や権力の中核にいる人物たちの性格がはっきりと描かれている点に南米的な風土、またクーデターが起こりやすい不安定さなどが現れている。最後まで銀山を守りぬいたドン・ペペ (Don Pápé) やノストローモを最初に見出したキャプテン・ミッチェル (Captain Joseph Mitchell) などの善良な民間人も忘れてはならない存在である。

この物語を通して、主人公になりうる人物は数多登場していることがわかる。一步間違えば

ノストローモの影がかすんでしまうと言っても過言ではなからう。事実彼が主体的に活動する場面は銀の輸送や最後の部分が中心である。それでもなお彼を浮き立たせているものは何かというならば、やはり上述のように、性格描写の上でのコンラッドの工夫といえるであろう。はっきり言ってノストローモほど一度に多様な性格を有し、かつ流動的な部分を見せる人物が他には見当たらないのである。したがってはっきり割り切れる性格でもなくまた他の人物たちのように対照をなす存在も見当たらない。彼の勇気と行動力は誰もが認めるところであり、利己的な面もあるが強い忠誠心もあり、信仰心のあるテレサを強く悼む純粋さも持っている。粗野ではあるがイタリア人としての船乗りのセンスや視野の広さも持ち合わせている。純粋ではあるが、最後に「自分が利用されていた」という唐突でややもすると独りよがりな理由から銀を盗み、また親代わりのヴィオラやその娘たちも不幸な目にあわせてしまうのである。⁸

こうしてみるとノストローモの人物像は、分析可能な他の人物たちの性格的な要素をいつでも具現し、またどの方向へも変幻できる実際の人間の弱さを持ち合わせた人物と考えることができるであろう。あまり英雄を主人公としないコンラッドが、今回も英雄的な要素を持つ人物に人間臭い最期を与えたとも解釈できる。しかし結論として言えることは、はっきり理解しやすい、すぐに比較対照できる人物たちの中にあり、誰の性格的要素も持ち合わせているようで、捉えどころのない難解な人物像を具現した点にノストローモの魅力があり、ある意味で他者との大いなる対照といえるのである。

I did not hesitate to make that central figure an Italian. First of all the thing is perfectly credible: Italians were swarming into the Occidental Province at the time, as anybody who will read further can see; and secondly, there was no one who could

stand so well by the side of Giorgio Viola the Garibaldino, the Idealist of the old, humanitarian revolutions. For myself I needed there a man of the People as free as possible from his class-conventions and all settled modes of thinking. This is not a side snarl at conventions. My reasons were not moral but artistic. Had he been an Anglo-Saxon he would have tried to get into local politics. But Nostromo does not aspire to be a leader in a personal game. He does not want to raise himself above the mass. He is content to feel himself a power—within the People.

(Preface to *Nostromo*, xi-xii)

物語の序文でコンラッドは主人公をイタリア人にするのを最初から決めていた旨を表明している。その理由として注目すべき点は、「もしノストローモがアングロ・サクソンであったならば地方の政治に関与しようとしたであろう」と述べている点である。これは作者の考え方の一端でもあると思われるが、ラテンそしてイタリアンとしてのノストローモの性格の中に、野心のない庶民の中に生きる人物像、知性以上に直感と情熱を重んじる人物を描こうとした意図があったことは間違いない。この部分を更に穿った見方をするならば、若くしてヨーロッパ、イギリスに留学していたグールドなどをアングロ・サクソンの人物の一人として描く意図があり、文明的な比較の上での民族的な特徴を対比させる試みも否定できないと思われる。⁹

以上様々な意味で、個々の人物的対照とコンラッドの民族的特色も考慮に入れた対照などが随所に感じる事が出来る人物配置であり、そのためにそれぞれの利害と感情の衝突、また同情などの流れに立体感と説得力を生み出している。

4. ストーリー構成上の流れとコントラスト

物語である以上、時間の流れと筋の運びは密な関係を有している。英雄的で、非の打ち所がなく、町中の泥棒たちに恐れられている存在、またしばしば“incorruptible”「腐敗しない」と形容されるノストローモは町中の信頼を一身に集めることになる。ストーリーの流れを見ると、彼が英雄らしく、またその本領を發揮するのは、革命の嵐がスラコを吹き荒れる期間である。物語の流れとしてこれは当然のことであるとも考えられるが、ストーリーの底流を流れるリズムを創造する事に関しては非常に重要な事柄である。¹⁰ つまりノストローモに関しては世間的な物欲よりも名誉（虚栄心）を非常に重んじる人間として描かれているが、この点に関しては銀山の発展と比例的な動きを示すのである。彼は政治的な野心もなく、またリビエラ(Ribiera)派やグールドを助けることがスラコの将来的な繁栄につながるといった深い信念があったわけでもないが、状況的に単に恩人のミッチェルの頼みで行動したのであった。しかし彼は激しく行動した。そして将来のスラコとコスタグアナ(Costaguana)を守るために、またその再建を行なうための切り札として半年間ためられた銀を隠す準備に取り掛かるのであるが、ここに大きな落とし穴がある。彼は銀を隠す任務を遂行することにより、この上ない更なる栄誉と名声を得ることができると信じていた。しかし命がけの苦闘の後、港に戻ってきてみると、自分なしでも厳然と存在する町の姿と、聳え立つイザベル島の様子を目にすることになる。

The plain had resumed its shadowy immobility. He descended the ridge and found himself in the open solitude, between the harbour and the town. Its spaciousness, extended indefinitely by an effect of obscurity, rendered more sensible his profound isolation. His pace became slower.

No one waited for him; no one thought of him; no one expected or wished his return. “Betrayed! Betrayed!” he muttered to himself. No one cared. He might have been drowned by this time. No one would have cared—unless, perhaps, the children, he thought to himself. But they were with the English signora, and not thinking of him at all.

He wavered in his purpose of making straight for the Casa Viola. To what end? What could he expect there? His life seemed to fail him in all its details, even to the scornful reproaches of Teresa. He was aware painfully of his reluctance. Was it that remorse which she had prophesied with, what he saw now, was her last breath?’ (422)

イザベル島から命からがら港に戻ったノストローモであったが、彼がもはや海の藻屑と消えてしまったと思われており、一度そういう状況になると、彼を当てにするものなどいないことを痛感する。精神的な誇りを唯一の心の支えとして活動してきた彼にとって、それは金持ちと権力者の手先に過ぎないといった自覚を与え、精神的な誇りから物質的な欲望へと傾く大きな転換点となる。

「物質」と「精神」という問題が再び浮かんでくるわけであるが、革命という特殊事情の中で、両者とも必要な要素であるが上に、大いにクローズアップされ、問題点の中心となっているわけである。銀山は物質的な繁栄の象徴として激動の時代も栄え、またノストローモの精神的なシンボルとしての活躍も象徴的に描かれて、人々にも大いに受け入れられてゆく。しかし革命や大きな任務の山場を越えて時局が安定期に向かうと、とたんに象徴性のほころびが露呈してくることになる。銀山は安定した富を産出し物質的な安定を約束するが、人々に精神的な腐

敗と驕りという害毒を流すようになる。ノストローモは自分の作り上げた精神的な理想像が大いに虚像（虚栄）であり、時流の中で取り残され、自分の隠した銀と同様に、なくても外部の環境は大した影響もなく動くことを発見する。そして富の力を信じるようになり、銀を盗むことを決意する。すなわち精神性の放棄を宣言するわけである。

このように見ると「物質」的な象徴としての銀山と「精神」的な英雄であったノストローモの墮落が機を一つにして始まっていることがわかる。また様々な面で場面設定を無駄には使わないコンラッドの緻密さを考えると、先ほど紹介したデクーと二人で銀をイザベル島まで運ぶために通り抜ける非常に深い闇の場面は、大きな意味があるものと考えられる。確かに闇がとても深いために、デクーが非常に心細い思いをし、また逆に妙な安堵感にも包まれて、生への執着が薄くなる一方で、ノストローモは野性的な本能を頼りに闇夜をたくましく船を操り、見事任務を果たす事実がある。これはデクーの知的な弱さと、ノストローモの本能的な精神力の強さを対比させる部分とも考えられるが、それ以上に象徴的な闇の中で大いに力を発揮するノストローモの性質を表しているのではないかと感じさせる場面である。それはちょうど「闇の奥」の中で、ジャングルの闇、文明の闇の中で暗黒の力を発揮したクルツにも相通じる不気味な能力と力である。¹¹

He gasped a little. Decoud was affected by the novelty of his position. Intellectually self-confident, he suffered from being deprived of the only weapon he could use with effect. No intelligence could penetrate the darkness of the Placid Gulf. There remained only one thing he was certain of, and that was the overweening vanity of his companion. It was direct, uncomplicated, naïve, and effectual.

Decoud, who had been making use of him, had tried to understand his man thoroughly. He had discovered a complete singleness of motive behind the varied manifestations of a consistent character. This was why the man remained so astonishingly simple in the jealous greatness of his conceit. And now there was a complication. It was evident that he resented having been given a task in which there were so many chances of failure. "I wonder," thought Decoud, "how he would behave if I were not here."

He heard Nostromo mutter again, "No! there is no room for fear on this lighter. Courage itself does not seem good enough. I have a good eye and a steady hand; no man can say he ever saw me tired or uncertain what to do; but *por Dios*, Don Martin, I have been sent out into this black calm on a business where neither a good eye, nor a steady hand, nor judgment are any use. . . ." He swore a string of oaths in Spanish and Italian under his breath. "Nothing but sheer desperation will do for this affair." (275-76)

こうした体験により、デクーは次第に自己の精神的脆さを暴露し、ノストローモはその超人的な勘や洞察力がさえ渡るが、それだけに後の物質的なものへの執着が強調される結果となる。

これは第三部「灯台」の場面と比較することにより明確となるであろう。すなわち革命が収まりコスタグアナが分離独立し銀山の富をもとに安定した経済的發展を遂げる様子が描かれる。金持ちや支配者階級の手先にはなるまいと決意し、自ら船による運送業を手がけるノストローモであるが、隠した銀を少しずつ盗み出して財を成すようになる。そして精神的な呵責（墮落）を重ねてゆく。イザベル島に灯台が作られる

ことになり、銀の回収に困ったノストローモはヴィオラの娘リングに燈台守をさせ、うまく島への上陸の口実とする。

灯台は全てを明るみにする象徴とも取れるが、銀山が物質主義の象徴で、人々に悪影響を及ぼす発信源であるとするならば、イザベル島は影響の帰結点であると考えられるのである。したがって最後の結末はこの島の方向が象徴的に指し示される。デューはこの島から死への旅立ちをし、銀塊をおもりに船から海中に身を投げる。ある意味では銀は物質的な糧であると同時に精神の腐敗と死へいざなう象徴とも考えられるであろう。そうした影響を受けたものたちが、最後に帰結する場所がこの島なのである。ノストローモも最後にジゼルとの密会中に、ヴィオラが嫌うラミレス(Ramirez)という別の男と間違えられて、ヴィオラに撃たれ致命傷を負う。これはまたヴィオラと娘たちの破綻を暗示する事件である。そしてさらに貞節なリングを裏切って奔放なジゼルに走るノストローモは、彼の精神性の墮落を暗示し、ストーリー展開の皮肉を示唆するのである。このようにして、「物質」と「精神」の流れが時間の推移と相呼応して、プラスの活動からマイナスの活動へと推移する。¹² しかもその間に「深き闇」の場面が挿入され、主人公の闇に反映される力が描かれる。そして全てが影響を帰結へと導くイザベル島へと向かうのである。しかし暗黒のもとで発揮される力も、白日の明かりの中では全ての効力を失ってしまうのである。

5. むすび

このように見てくると、小説『ノストローモ』が非常に複雑で、登場人物が多岐にわたっているにもかかわらず、一定のリズムと流れがあることがわかる。単に煩瑣で複雑な話に終わらず、読むものに強い印象と感銘を与える要素がある理由には、優れた技法と構成が存在しているのである。結論として言えば、一つには登場する

事物に象徴性を持たせる巧みな設定がなされた、つまり対照的な配置である。そしてそれらは事物や人物だけにとどまらず、ストーリーの流れ、時間の流れの中にも設定され、大きなストーリーの流れに関わるリズムを生み出し、読者に強い潮流のような印象を与えているのである。コントラストの枠組みとしては銀山の「物質」的な富としての象徴性があり、それに対比して様々な人間の「精神」性と暗を照らし出す灯台が登場する。そして権力者や軍人、民間人など多くの人物たちが、グールドをはじめとする物質的繁栄の富を重んじるものと、グールド夫人やアントーニア、テレサのように精神的なものやモラルを重んじるものとの比較的わかりやすく判別されるのである。そうした意味でデューやモニガム医師(Dr. Monygham)は複雑な要素を持った人物たちであるといえる。

ノストローモはそうしたコントラストの中で、前半と後半が大きく変わる人物である。前半は精神性を重んじ、後半は物質欲に取り付かれ墮落してゆくことになる。そうした「物質」と「精神」面の対比を軸に描き、また時間的な経緯としては革命の激動期から安定の時期へと時代が移るわけであるが、銀山を中心とした人々の思惑や影響から事件が起こり、最終的にイザベル島をめぐる結末へと事が運んでゆく。この間大きな流れの転機となる場面はノストローモの銀運び出しの場面であり、象徴的な深い闇の中でノストローモは超人的な力を発揮し任務を果たすが、彼の精神と考え方の大きな転機となり、物欲を求めるノストローモが誕生する。そして町の雰囲気も腐敗してゆくことになる。そして象徴的なイザベル島の「灯台」をめぐる話が収斂してゆくのである。

ストーリーの流れから考えるならば、銀山とイザベル島灯台が象徴的な出発点と帰結点ということができよう。また物語の推移とノストローモの変化も、物質的安定が精神的腐敗をもたらす対照を示すことになる。そして物語の転換点となった「闇」と、物語の最後の部分、「灯

台」もやはりはっきりとした物語展開のコントラストをなしているといえる。そして最終的にノストローモがヴィオラから娘の誘惑者と間違えられて撃たれ、死ぬ間際にグールド夫人に銀の隠し場所を打ち明けようとするが、夫人の説得で口に出さぬまま息を引き取る。これは墮落はしたが最後の瞬間に主人公の精神性が保たれたものと解釈することもできる。以上の意味で「物質」と「精神」性の葛藤は最後までこの物語の組み立ての大きなテーマとなった。¹³

こうした意味で、個々の要素を生かす象徴性の縦糸と、それらを際立て結ぶコントラストの横糸は、時間とストーリーを結ぶ同様な象徴と対照を含めてこの物語を巧みに組み立て一つの大きなタペストリーを演出していると考えられる。この複雑な小説を力強い、流れのある作品に仕立てている鍵として、コンラッドが以前にも用いている手法ではあるが、特にこの作品での「象徴性」に基づく「コントラスト」の働きは大きいといえる。

注

1. Joyce Carol Oates, “‘The Immense Indifference of Things’; The Tragedy of Conrad’s *Nostromo*”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, ed. Keith Carabine, 4 vols. (Mountfiels: Helm Information Ltd, 1992), II, 604. ここでは “The novel is symbolic, then aggressively realistic; it smothers us with detail, then draws back to make certain psychological analogies between the silver and the interior delusions that guide most of the novel’s characters.” という言及がなされ、この作品の象徴性、とくに物質的な事物と、登場人物の精神的な面との関連性が指摘されている。
2. Joseph Conrad, *Nostromo: A Tale of the Seaboard, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad* (London: The Gresham Publishing Co. Ltd., 1925), VIII, 52. 以後コンラッドの作品からの引用は全てこの版による。またこれ以降の同作品の引用箇所にはページ番号のみを記す。
3. Arnold Kettle, “The Greatness of Joseph Conrad”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 563. この作品のテーマに関して, “The main theme of the novel, fundamental to the personal themes that form the ‘story,’ is the corrupting power of the silver mine,” と定義し、銀山の精神的なものに対する腐敗的な力を強調している。
4. “The Immense Indifference of Things”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 602. 銀山の力に関して, “Like the ivory of *Heart of Darkness*, the silver of the San Tomé mine casts a kind of enchantment over the land. Men are bewitched by it or seduced into desperate action on its behalf; like the accursed gringos, drawn to treasure out onto the peninsula of Azuera and thereby trapped under the ‘fatal spell of their success,’ they lose their souls—are paradoxically rich and yet starving.” と言及し、上述のネガティブな力と同様に人々と国家に与える影響、またあらゆるものを強く引きつける力を説明している。
5. Robert Penn Warren, “*Nostromo*”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 580. *Lord Jim* (1900) における「破壊的な要素」“destructive element”を論じて次のように述べている。“To conclude the reading of the passage, man, as a natural creature, is not born to swim in the dream, with gills and fins, but if he submits in his own imperfect, ‘natural’ way he can learn to swim and keep himself up, however painfully, in the destructive element. To surrender to the incorrigible and ironical necessity of the ‘idea,’ that is man’s fate and his only triumph.” 以上のことは『ノストローモ』にも当てはまるものと考えられる。すなわちイザベル島が主人公をはじめ、物語の展開にかかわる様々な人物たちの「考え」“idea”の帰結点になっていることにより、最終的な「自滅」を象徴的に表すプロセスを示唆している。
6. Paul B. Armstrong, “Conrad’s Contradic-

- tory Politics: The Ontology of Society in *Nostromo*”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 658-59. 『ノストローモ』においては様々な価値観や人物たちが一時に存在しているが、その多様性に触れて次のような言及がされている。“But Conrad’s relentless quest for values—his almost strident affirmation, for example, of fidelity, honor, and mastery—insists nonetheless on the need to believe. Unable to resign himself to his negative conclusions, Conrad also affirms the importance of transcending contingency—even if this is an unattainable goal.” このことにより、多面的な矛盾する要素を乗り越えて統一的な見解を求めようとする作者と、また現実的な多面性を受け入れ、より真実を描こうとする作者の葛藤を示唆している。
7. “Conrad’s Contradictory Politics: The Ontology of Society in *Nostromo*”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 655. 南米の政治的気質を“evolution”と“revolution”の対比を用いて分析している。“Despite this abusive caricature, however, Conrad’s novel ironically but importantly undercut the hope of evolutionary change and instead portrays revolutionary action as a more effective route to social betterment. The evolutionary model fails disastrously and ingloriously with the collapse of the five-year transitional dictatorship of President Ribiera.” コンラッドは“revolution”を基調として南米の国情を描いたが、これは彼自身の世界観とも一脈通じるところがあり、結局この作品の舞台を的確に描写することに成功している点を指摘している。
8. “The Greatness of Joseph Conrad”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 566. コンラッド作品の特徴の一つを、“Betrayal and isolation—that sense of guilt so powerful in the socially and intellectually dispossessed of our time—are powerful themes in Conrad’s novels.”と評し、『ノストローモ』における悲劇的結末を体系付けている。
9. Peter Christmas, “Conrad’s *Nostromo*: A Tale of Europe”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 622. “After the French betrayal of Poland in 1863, disgust was probably the greater part of Conrad’s attitude towards Louis Napoleon when he thought of him as an individual person; but, considered as the representative of Caesarism, the emperor inspired fear as well. That is why Conrad turns back to the Anglo-Saxons, whose limitations he knows so well and whose virtues are small but reliable.” 以上の引用内容を含め、コンラッドの個人的な民族(アングロサクソン)に対する感情や考え方を分析している。
10. “The Greatness of Joseph Conrad”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 563. 登場人物と物語の流れ、背景について次のように言及している。“In fact, the characters are not simple at all; by the end of the book their depths and complexities are well established; it is their presentation which is simplified. Like the Elizabethan dramatists, Conrad employs his own convention for the revelation of social life.” コンラッドの人物描写に関してはその複雑な部分が、社会的な背景との関わり合いの中から、次第に顕著に現れてくる特徴を指摘している。
11. “The Greatness of Joseph Conrad”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 561. “The theme of the story is degradation—the degradation of the ruled and of the rulers: darkness, horror, death. The irony is fundamental to the whole concept of the story and, for the most part, it is a controlled irony: the ignorance and complacency of the metropolitan organisers contrasted with the facts of colonial exploitation; the idealisation of Kurtz by his fiancée contrasted with the truth, that he is the very essence of dark corruption.” この言及によりコンラッドの描写が強いアイロニーを含むものであると指摘しているが、闇の中で銀を輸送するノストローモにしても、“degradation”のプロセスとあわせて考えると、クルツの描写と共通したものを感じさせ

- る。
12. “‘The Immense Indifference of Things’; The Tragedy of Conrad’s *Nostromo*”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 593. コンラッド作品における精神と物質の関係に触れて次のように言及している。“The spiritual cannot, in Conrad, redeem the material; spiritual interests *cannot* bring material interests into the truly human sphere. - 13. “*Nostromo*”, *Joseph Conrad : Critical Assessments*, II, 583. “First, *Nostromo* is a complex of personal stories, intimately interfused, a chromatic scale of attitudes, a study in the definition and necessity of ‘illusion’ as Conrad freighted that word. Each

character lives by his necessary idealization, up the scale from the ‘natural’ man Nostromo, whose only idealization is that primitive one of his vanity, to Emilia Gould, who, more than any other, has purged the self and entered the human community.” この作品の人物たちの行動原理を“idealization”という言葉でとらえ、コンラッドの作品の描き方は、執筆による探求という態度が存在していることを示唆する。最後の主人公の秘密保持の態度と死は、そうした意味でエゴイズムからの“idealization”から、コンラッドが理想とする精神的“idealization”へ、作者が主人公を飛翔させた姿と捉えることできる。

Contrastive Structure in *Nostramo* : The Function to Connect Miscellaneous Elements

Hiroshi WATANABE

One of Conrad's prominent works, *Nostramo*, includes a number of elements concerning its characters and complicated landmarks, which often gives confusing images to its readers. But through the story, it has certain rhythms in its structures and arrangements of its elements. Because of such rhythms the story is never boring and holds an exciting suspense and persuasiveness to the end. One of the important factors that produce the rhythms is the excellent use of 'contrast' among the many, in some way, confusing, elements. The purpose of this paper is to analyze the use of contrast in several aspects and to find their effects in this story, also considering the symbolic meanings of the elements.